

琉球大学学術リポジトリ

沖縄・本部町具志堅区シヌグ、亜対生葉序をもつ祭祀植物ヤブニッケイの意義

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2016-08-23 キーワード (Ja): シヌグ, 祭祀植物, ヤブニッケイ, 亜対生葉序, 沖縄 キーワード (En): Shinugu, religious ceremony plant, Cinnamomum japonicum Sieb, subopposite phyllotaxis, Okinawa 作成者: 新里, 孝和, 芝, 正己, Shinzato, Takakazu, Shiba, Masami メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35006

沖縄・本部町具志堅区シヌグ、亜対生葉序をもつ祭祀植物ヤブニッケイの意義

新里孝和^{1*}、芝 正己²

¹国頭村文化財保存調査委員、沖縄県文化財保護審議会専門委員、

²琉球大学農学部亜熱帯地域農学科

Significance of *Cinnamomum japonicum* Sieb. with features of subopposite phyllotaxis being used in Shinugu religious ceremonies in Gushiken village, Motobu, Okinawa

Takakazu SHINZATO, ^{1*}and Masami SHIBA ²

¹ Kunigami village cultural properties preservation survey member/Expert commission member of cultural properties of Okinawa Prefecture

²Department of Subtropical Agro-Production Sciences, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus

キーワード：シヌグ、祭祀植物、ヤブニッケイ、亜対生葉序、沖縄

Keyword: Shinugu, religious ceremony plant, *Cinnamomum japonicum* Sieb. subopposite phyllotaxis, Okinawa

*Corresponding author(E-mail: shinri@trad.ocn.nc.jp) *

具志堅区のシヌグ

本部町のシヌグが行われるのは、1666年伊野波間切が設置された（翌年本部間切となる）具志堅、備瀬、謝花、浦崎、浜元、並里、伊野波、渡久地、辺名地、健堅、崎本部、石嘉波（瀬底の小字）、瀬底の13か字の古村で、具志堅区のシヌグはシニーグと称され、毎年旧暦7月19日から7月26日にかけてウンジャミ（海神祭）と一連の行事として行われる。シニーグ祭祀は旧7月19日ウーニフジ（御船漕）、旧7月21日フブユミ（大弓）、旧7月23日シルガミ（トン・トト・トン神、男ヌユバイ）、旧7月24日女ヌユバイ（シニーグミチー神酒）、旧7月25日ハートンチミチ（暁神酒）、同日ソーニチ（シニーグ舞）、旧7月26日タムトノーイ（タムト直し、祭りの慰労会）と続

くが、祭祀植物のシバ木（ヤブニッケイ）が使われるのはシルガミ（トントトトン神）のときである¹⁾。

仲田²⁾の調査（1985～2000年）によると、シルガミ（トントトトン神）は午前中に女性がお宮（火の神）男性が大川の清掃をする。大川の掃除は、区長が香炉に酒（泡盛）、御花米、線香を供え「掃除と湧口の杭の取り換えを行なう」事を告げ、大川の堰を取り外し、ごみや泥を取り除く。湧口の杭の取り替えは、9本のうち毎年3本ずつ替える。杭の木はウグァン山から伐り出されたものである。杭の取り替えが済むと、区長が供えていた酒を新しい杭にかけ、大川の掃除を終える。

16時頃、ヌルクミー、ヌルヌメイがお宮の中に入って神衣装を着け「悪疫祓い」の御願をする。供え物は泡盛（御五水）、御花米、線香で、神酒は4つの椀に注いで盆

に乗せる。御願が済むと神衣装を脱ぐ。16時半頃、公民館の世話役がシマンベーフ（島大屋子）の代理として登場し、襟の後ろに柴木の小枝を挿して小さな鼓を持ち、トントントンと叩きながら先頭になり、祝女や神人がその後ろについてクラン毛へ移動する。クラン毛では東側にゴザを敷き、泡盛、御花米、神酒、線香を供え、祝女が「今日はトン・トト・トンの折目なので供え物を召し上がって下さい。また本来は男神（シマンベーフやシル神）が来るところだが、男神がいないので私達が来ました」と神に許しを請う。1999年は区長がシマンベーフ（代理）として御願する。

17時頃、シマンベーフ（代理）が先頭になって鼓を叩き、大川へ行く。大川の香炉の前に供え物をし（泡盛、御花米、神酒、線香）、祝女と女神人が神衣装を着け、3回にわけて御願する。1回目は大川、2回目は流れ庭、3回目はミハージ（浜）に対するもので、御願の後、神人は神衣装を脱ぎ大川の水で顔を洗う。大川で解散し、シルガミの行事が終わる。



図1 フブガーのカーサライ（大川の掃除）
(2015年9月5日)

2015年9月5日（土曜日、旧7月23日）シルガミの調査をした。午後から大川の掃除は大勢で丁寧に行われた（図1）。大川の湧口に立てる9本の杭はモクタチバナであった。残念ながらシマンベーフが襟の後ろにヤブニッケイの枝を挿し、鼓をトントントンと叩いて行く行事は最近ではやっていないといい、その日も見られなかった。本論

は、シマンベーフが襟の後ろに挿すという柴木の小枝のヤブニッケイと大川の湧口の杭に用いられるモクタチバナの民俗的な意義について考察したい。

ヤブニッケイの生態と民俗

ヤブニッケイ (*Cinnamomum japonicum* Sieb.) はクスノキ科クスノキ属の中高木性の常緑広葉樹である。クスノキ属は世界に約250種が暖帯から熱帯に生育し、インド、東アジア、マレーシア、メラネシア、オーストラリアに分布する。クスノキ属 (*Cinnamomum*) は日本では本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島に3種で、ヤブニッケイ、クスノキ (*C.camphora*(L.) Presl)、マルバニッケイ (*C.daphnoides* Sieb.et Zucc.) があり³⁾、琉球列島には4種1品種1雑種で、ヤブニッケイ（各島の海岸低地から山地）、マルバニッケイ（硫黄島島の海岸地）の他に、シバニッケイ (*C.doederleinii* Engl.、ほぼ各島の山地)、ケシバニッケイ (var. *pseudodaphnoides* Hatusima、奄美大島と慶良間群島の山地)、ニッケイ (*C.sieboldii* Meissn. ex Nees、徳之島と沖縄島国頭の山地)、シバヤブニッケイ (*C.×takushii* Hatusima、沖縄島と久米島、阿嘉島、慶留間島の山地) が自然分布する^{4,5)}。

ヤブニッケイは宮城県、富山県以南西から四国、九州、小笠原、琉球列島、南朝鮮、台湾、中国中南部に³⁾、中国（中国名は天竺桂）では江蘇、浙江、安徽、江西、福建の東海側に分布するが⁶⁾、琉球列島ではとくに海岸や低地の石灰岩地の森林で高木層の優占種になり、石灰岩地帯の里山や御嶽林や屋敷林によく生育する。

沖縄島の石灰岩地においてヤブニッケイの森林は本来の自然林の人為干渉による代償植生・二次林で、ナガミボチョウジーヤブニッケイ群落、カルストや石灰岩丘陵地などにヤブニッケイ・クロツグ群落が発達する⁷⁾。高木層にヤブニッケイが優占するヤブニッケイ群落は、石灰岩地の自然林が残る御嶽林で国頭村辺土名世神の宮、奥間土帝君、北中城村金満御嶽、知念村畜場御嶽（現南城市）などほぼ全域にみられる⁸⁾。南部地域の20か所の森林植生の調査において、ヤブニッケイが他の樹種に対して高木層に占め

る比率は、頻度 95%、積算優占度 96%で、樹高が約 6m～10m、胸高直径が約 11 cm～24 cmであった⁹⁾。本部半島の石灰岩地の照葉樹二次林は地域的にイスノキの優占度が高く（平均優占度 2.2、頻度 60）、ヤブニッケイは全地域に渡って生育し主要な樹種となっている（平均優占度 2.0、頻度 100）¹⁰⁾。

本部半島の地質は、古期石灰岩、琉球石灰岩が広く分布し、嘉津宇岳・八重岳からその裾部に小丘状の古期石灰岩カルスト山地と低地—海岸部に琉球石灰岩地が広がる。具志堅区の周辺地は、山里区の特徴的な円錐カルストを中心に大部分がこれらの石灰岩を基岩とする。具志堅—嘉津宇—大堂—山里区の森林植生は、石灰岩地を反映して二次林のリウキュウマツ群落や常緑広葉樹が優占するヤブニッケイ群落が発達する¹¹⁾。

沖縄島のヤブニッケイ群落はヤブニッケイの他タブノキ、イスノキ、ホルトノキ、クスノハカエデ、ハマイヌビワなどの常緑広葉樹林から成り、伐採による木材の利用頻度が高く、またヤブニッケイそのものも広く利用される。ヤブニッケイの材は辺材心材の区別がなく、黄白—淡黄褐色、堅硬・緻密、芳香があり、建築、家具、装飾、器具、薪炭に利用する^{3,12)}。果実は油が多く（56～60%）、採油し、昔はこれを燃やしてローソクの代用、またカカオ脂の代用とし、常温でも固まらない性質を利用して坐葉の原料にした。奄美大島ではこの木を防風林、屋敷林に用い、多くの種子を採って油の原料に売っていたという。長崎の松浦では樹皮を採って松浦桂心と呼んで薬用として売っていたので、マツラニッケイの別名があった^{13,14)}。本部町渡久地区ではヤブニッケイをジッココンといい、液果は倒卵形、大きさが長さ 11～14 mm、径 9～11 mm で 10～11 月頃に黒紫色に熟し¹⁵⁾、幼少の頃は寒い季節が来るとジッココンの果実を里山から採って果皮を除き、鍋に焼いてよく食べた。ただ、油が含まれているせいかそれほど多くは食べることができなかつた。普段の生活にとっても子供にとっても馴染みの深い樹種であった。

ヤブニッケイは石灰岩地域の人の生活に関わる里山林で多産し、木材の用途も幅広く、かつては建築・家具材の他、とくに煮炊きの燃料に使い易く枝葉とともに日常的によく用いられたと思われる。ヤブニッケイはシヌグ植物の

条件の一つである“身近に得られる材料”に適うことになり¹⁶⁾、石灰岩地に暮らす具志堅区民のシニグ祭祀植物に長く伝承されてきた所以であろう。

ヤブニッケイは照葉樹林域の普通種で、火がつけやすく火力があるので薪によく使われたせいか、同じように使われる他の樹種とも複合して各地の方言名が多い。「樹木大図説」の方言名には¹⁴⁾、クスタブ、ダモ、ダマ、タマ、タモ、タボ、クスダモ、アブラダモ、カラダモ、クロダモ、メントダマ、クロダマ、タマグス、タマノキ、タモノキ、インダブ、タブ、コタブ、アラタブ、カラタブ、センタブ、センコタブ、センカウタブ、グウグウタブ、クロタブ、ケシントブ、ケイシントブ、ニクケイタブ、マツラニッケイ、ヤマニッケイ、マツウラニッケイ、ヤマニッケン、ヤブニッケン、ヤマニッキ、ヤブニッキ、ニッキ、ニケイ、ヤブグス、ツルグス、イヌグス、コガノキ、クロコガ、コガ、アブラコガ、ヤブサカキ、アブラシバ、タマクサ、クスメンドウ、コガイノキ、メンドダモ、クロタツノキ、ヤマゲシン、マツラケイシン、イヌゲイシン、インゲシン、インゲセン、イゲシン、ツツノキ、イヌツツ、ツツノミ、ケビ、クロツツ、クロツツノキ、クロタツノキ、アラキ、トゥノキ、エマキ、ウコギ、ウコ、クロタマカラ、タマガラ、アサカマ、クロアサダ、アサダ、ムズ、アサダノキ、アサカイ、スズメノキ、シジメ、スズレギ、シホダマ、ゴongo、クスメントウ、ホトケタラシ、ホトケダラ、スザラ、シバキ、ソバキ、シダラ、タミノキ、クサダミ、オチャノキ、ユツカツラ、シロダモ、スイベ、カツラ、メカツラ、タマタブ、タマダモ、シスシヌム、サイントルナム、天竺桂、土肉桂、丹陽木、が記載されている。

シロダモの名は月桂の名の混乱で、月桂樹としてクスノキ属 (*Cinnamomum*) やシロダモ属 (*Neolitsea*) が *Laurel* 属にまとめられていた時代もあったことにも因らう¹⁴⁾。深津¹⁷⁾はイタビ、タブノキ、クスノキの項で、『大和本草』(1755年)に「タブ木ニ二種アリ、一種ハ白タブト云イ、葉ハ桂樹(深津・注、桂樹はヤブニッケイ)ニ似テ香気少シ、冬赤キ実ナリ、ツツノ実ト云ウ」とあるのはシロダモ (*Neolitsea aciculate*(Bl.) Koidz.) である、と記している。前川¹⁸⁾は「クロダモは果実の黒色、同じくクスタブは葉の三行脈、またシロダモは葉裏の白色を区別点

としてタブを基準につけた名であり」とし「ヤブニッケイ、イヌガシ、シロダモ等の三行脈の著しい葉を持ったクスノキ科の種類を区別しないでトウノキ(各地)と呼ぶ」としている(図2)。具志堅区ではヤブニッケイをジコンと称し、これに似た木があるといってタブノキを示したが、方言名もタブであった。クスノキ属、タブノキ蔵、シロダモ属の樹種間には、方言名が混在しているようである。

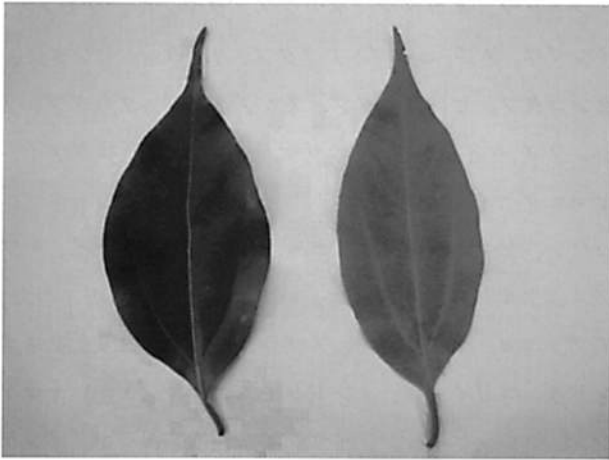


図2 ヤブニッケイの葉の三行脈(左;表面、右;裏面)
(中城村 2015年11月28日)
中肋(主脈)の両側に1本ずつ大きな葉脈が出ている(3本脈)

植生上、日本の照葉樹林帯は沖縄から東北部までヤブツバキクラスにまとめられ、高木層の優占種でタブ型(沿岸型)、シイ型(低地型)、カシ型(内陸型)に区分される¹⁹⁾。いずれの森林型にも人為による二次林が発達し、クスノキ科の樹種は構成種となって広く分布する。照葉樹のシイ類やカシ類と同様にクスノキ科は主要な用材で、材の性質や量からして、建築資材の他、かつて炊事や暖房の燃料である薪炭材の重要な資源であった。生活に密着した材の用途や形質の類似性から、クスノキ科のクスノキ、ヤブニッケイ、シバニッケイ、タブノキ、シロダモなどの方言名は相互に深く関与する。

牧野²⁰⁾はタブやダモの名はこの類の総称であろうが意味は不明とする。前川¹⁸⁾は「タブはタモという。(中略)ヤブニッケイの別名クロダモは果実の黒色、同じくクスタブは葉の三行脈、またシロダモは葉裏の白色を区別点とし

てタブを基準につけた名であり、ここにタブノキの基準としての性格を見出すことができる。」として、タブノキの碧玉に似た果実からタマモモと呼び、これがいつかモモモ桃につながるとする。クスノキ科の樹木の方言名には○クス系の名としてクスノキにクス・ホンクス・マグスなど、ヤブニッケイにタマグス・ヤブグス・イヌグスなど、タブノキにシマグス・ヤマグス・タグスなどがあり、○タブ・タマ系の名としてニッケイにニクケイタブなど、ヤブニッケイにダモ・タマ・タブなど、タブノキにホンタブ・タマノキ・クロダマなど、アオガシにホソバタブ・シラタブ・クソタブなど、シロダモにウラジロダモ・キタタブ・タマガラなど、イヌガシにホソバノシロダモなどがある。

琉球列島のヤブニッケイの方言名には²¹⁾、ウフバーシザキ(伊平屋)、ウフバーシジャーキ(渡嘉敷)、ウフバーシバキ(許田・久志)、ジクミ(喜界)、ジコーミギー(諸志)、ジコン(具志堅)、シジャラ(与那)、シダラ(奄美・徳之島・沖永良部・与論)、シダラギ(徳之島・沖永良部・与論)、ジククミ(与那)、ジククン(饒波・久米島仲里)、ジッチャギ(伊良部)、シバ(琉球国由来記)、シバカー(世富慶・知念)、シバカーギ(知花)、シバキ(宇茂佐・漢那・首里・久手堅)、シャームヤギ(宮古)、シララ(安波・与那)、スイザラギ(奄美大和)、スイダラギ(奄美・徳之島・沖永良部・与論)、スダラ(奄美)、セダラギ(与論)、セッケンギ(久米島具志川)、ヂクンギ(座間味)、ヂィザギー(宮古)、ツツアギ(宮古)、ツツヅヤギー(宮古狩俣)、ヌーマンビンガスギ(宮古)、ヒダラギ(徳之島・与論)、ブーシザキ(西表)、フチャギー(伊良部国仲)がある。

ウフバー(葉が大きい)、ハーグワ・ハククワ・ファヌクワ(葉が小さい)など、形態が近似するヤブニッケイとシバニッケイを区別するための名があり、また照葉樹林帯各地と同じようにクスノキ属、タブノキ蔵、シロダモ属の名前には樹種間の区別のやりとりあるいは混在がみられる^{21,22)}。照葉樹林帯ではタブノキを基準にした各地の名前があるようだが、琉球列島でもほぼ同じように波及しながら、これら3属はシバキ、トウノキが一連として名が生じてきたように感じられる。

ヤブニッケイは柴木の代表か

照葉樹林帯におけるシバ・シバキ系の柴の流れをくむ方言名は、ヤブニッケイのアブラシバ・シバキ・ソバキ・シダラなど、マルバニッケイのミサキシバ・チメシバ・シバキがあり¹⁴⁾、琉球列島にはヤブニッケイやシバニッケイ、シロダモ、イヌガシにジギ・シバ・シバキ・シザキ・シザル・シダラ・シバカー・スダラ・ヒダラ・スイダラ・スダラ・セダラを付ける名が多くある^{21,22,23)}。

シバ(柴)は「山野に生える小さな雑木。また、それを切って、薪や垣根とするもの。そだ。しばき。ふし。」であるという²⁴⁾。飯島²⁵⁾によると、柴とは特定の樹種をさすのではなく、山野に生えているあまり大きくない雑木やその枝で、どこでも容易に入手でき、燃料とするほか、神をまつるにも用いられる。祭祀用には、主に常緑の柴が神の依代とされたり神に手向けるのに使われた。峠や村境の路傍には<柴立て><柴折り>という所があり、ここに柴を挿して旅や行路の安全を祈る。柴で囲って神域を示し、悪霊から身を守り、野宿の際には四隅に柴を挿して山の神から地面を借り、また祭場の中心に神の依り代として柴を立てたり、祭場の境に柴を立てて神域とする。<柴垣>は青葉をつけた柴を束ねて垣根とし、青葉の盥に守られた神聖不可侵の安住の世界であることを表したものである、といわれる。

大晦日の晩、いろりて燃やす火をとくに<年取りの火>などとよび、このときの薪をショウガツキ(正月木)、セチホダ、ヨツギホダ、トギなどといって暮れに山から伐って用意しておく。夜ごと、オキに灰をかぶせて何代にもわたって火種を絶やさぬ村や家も各地にあり、正月の初山入りに男が山に行つて柴をとってくる風も各地にある。修験者がたく護摩木は、この火によってすべての罪障を焼きはらい、不動明王と一体化するなどといった意味があり、土地ごとにカツギ(勝木)と称される木が選ばれている。宮中での御竈木(御薪)、正月の神祭用の薪である年木(鬼木や辛木などともよばれる)で、竜宮の水神に薪を与えるモチーフをもつ<竜宮童子>の昔話などから、薪が単なる燃料ではなかったことがわかる、とされている²⁶⁾。火は文明を根本から転換し、すべての物を焼きつくすほどの

威力を持ち、寒さを凌ぎ家族や仲間を寄せ付け、衣食住の不可欠のものとなり、火に呪力を認めていた時代には、薪にも同様な力があると信じられていたのだろう。

洞窟や淵に投げ込む柴木は竜宮の大切な宝物で、そのお礼に竜宮に招待された爺さんは帰りに竜宮童子を授かる²⁷⁾。竜宮童子は子孫、血族、部族の繁栄と持続の願いが込められているようにみえる。柴木は、日常の用材であり、生活の大事な燃料材であると同時に、火に呪力があり、神の依り代で神がやどり、個人の身-村人-村落を守護する照葉樹である。それは里山の木であり、いつでも入手できる身近な木である。柴は、またニライカナイ・竜宮の世でも大切な木であり、奉納品である。シヌグ・シニグ・シニグのカブイや杖棒や身につける枝・草木は、祭祀の最終には海や川に流し異界へ捧げる。

神話や民話から推察すると、柴木は火の観念があり種々有用で、今生の生活だけでなく根の国・竜宮の世界へつながり、その思いが土俗信仰の神の依り代として祭祀の呪具になってきたのではないかと思われる。シヌグの植物観¹⁰⁾でみられるように土俗信仰の祭祀植物の起こりには身近で採集できる照葉型に託されたであろう。中国神話のモモがより神聖化され²⁸⁾、柴木と母性の思いが複合し、照葉型は民俗の歴史のなかでさらに照葉樹の地域型になってきたと考えられる。モモは大陸の神話の果実であり、深山の桃源郷の異界を思うは、柴木の水界のニライカナイ・竜宮と同系となる。

神話の柴木から祭祀の呪具となる樹種は、普遍的な照葉樹のサカキやシキミに地域性がとりいれられて変容し、照葉樹林帯の西方以南では主としてサカキが、サカキの少ない中部地方ではヒサカキが用いられる、ヒサカキはサカキに比べて小型であることから姫サカキの訛りであるという^{20,29)}。亜熱帯気候下の沖縄・琉球ではさらに特化し、サカキに類似する二列配列葉序や十字対生葉序をもつ樹種となる¹⁰⁾。モクレン科のオガタマノキの花は香りがあり、神事に用いられ、サカキといわれたのは昔はむしろオガタマノキであったともされ²⁹⁾、祭祀に用いられる同科で花が香ばしいシキミにつながり、枝葉に一種の匂いのあるゴンズイ²⁸⁾やヤブニッケイにも関与するのだろうか。国頭村奥区はシバカー(ヤブニッケイ、シバニッケイ)を

シバヒといい、シヌグにその独特な匂いで祓うとある³⁰⁾
(※シバヒはイヌガシの誤認だろう^{16,22,31)}。

思いをより戻すと、ヤブニッケイは亜対生葉序をもつ祭祀植物として合掌型(十字対生型)としたが¹⁶⁾、図3のように葉は枝上に対生となる場合も互生と捉えられる場合もあり^{3,4)}、ボチョウジやアデクのように典型的な十字対生葉序ではなく、対生で二列配列様になるシマミサオノキや、互生で二列配列型になるサカキやヒサカキのような葉序となる。つまり、ヤブニッケイはいずれの場合も不明瞭な“亜”であるが、合掌型と団扇型が合併するような変則的葉序である。ヤブニッケイの三行脈(図2)はまた、国頭村奥区と同じクスノキ属のイヌガシや比地-奥間区のカエデ科のクスノハカエデに通じる。



図3 ヤブニッケイの亜対生葉序(本部町具志堅)
(2015年11月27日)

柴は、最初に薪に使われる身近な里山の普通に産する木全般を言い、文明が少しずつ進展し複雑になって、柴も熱量など性質の違いに気付いていき、最も普通に産し、燃え易く熱量のよいものが柴木となり、他の木は劣ったり希なものにはそれなりの名前がつき、地方によって異なるものの、シバキとそれに近い性質をもつものが何々シバキになってきたのだろう。天地の神がより定着したものとなり、シバキの分類がより明らかになると、それらの性質から葉が常緑、単葉、全縁で、光沢があり、二列配列葉序が神への奉物・呪具にふさわしいシバキとしてヤブニッケイが選定されたのではないだろうか。そして身近にあり、

同じ単葉・照葉の柴木から、より神々しい性質・形(二列配列葉序の団扇型)をもつサカキに到達したのではないかと思われる。

祭祀植物の起原と歴史は、柴木とモモさらに植物と民俗の地域性で変化して固定化し伝承されていく。柴木は火がもとにあり、焼畑農業で雑草や病原菌の災厄の全てを焼きつくした跡に、新しい作物の栽培を可能とする、すなわち暮らしの食の安寧を保証し、地に生きるもの-生命の存続、子々孫々の繁栄-再生を祈願する母性信仰である。柴木は桃神話によって厄払い・威力を増し、母性信仰が形となってより強化される。焼畑時代の生活は山が生産のもとであり、照葉樹林帯の里山における樹種の常緑性、照葉樹の代表にヤブニッケイがあり、その性質はついに枝葉の匂い・香りに及び、琉球列島のシバキの三行脈、独自の十字対生葉序へと進行する。

葉序でみると

亜二列対生(ヤブニッケイ)→二列配列互生(サカキ、ハマヌビワ)→二列配列対生(シマミサオノキ)→束生(シキミ、イヌガシ)・十字対生(ボチョウジ、ナガミボチョウジ、クスノハカエデ、アデク)の変遷が考えられる。

これらに中国の神話のモモを加えて祭祀植物の性質や民俗を眺めると

○ヤブニッケイ:柴木は火がもとにあり、焼畑農業で雑草や病原菌らの災厄の全てを焼きつくした跡に、新しい作物の栽培を可能とする、すなわち生命の再生・持続・母性信仰である。神、自然への謝恩・祈り、竜宮・桃源郷への思い、竜宮への道しるべとしての柴木。柴木・サカキの初期の代表種であろう。襟に差す(具志堅区)。

○ゴンズイ:中国・モモの神話から柴木の呪具の変化が起こると考えられる。天に昇る鳥、天上と人の世の往き来の関係、天・神・常世と冠の枝葉を介して思いを伝えたのではないか。

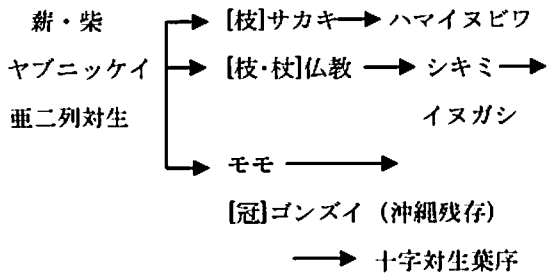
○サカキ:神の依り代、祓い(悪、疫厄)の呪具、神社、米作・弥生式文明に関係し、ハマヌビワの枝葉は冠、杖でもなく、腰に差す(瀬底島)。

○シキミ:仏教の蓮型、祓いや“揺する、地に立てる”で祭壇に差す、豊作・予祝に関係し、イヌガシにつながる。

○ボチョウジ:十字対生葉序、“祈り”でニライカナイに

関係し、アデク、クスノハカエデ、ナガミボチョウジがある。

総合的に祭祀植物の変遷を考えると、以下の構図が描かれよう。



植物の枝葉で纏うのは、神への礼服となり身の危険を和らげる装身具の役割を果たすと思われるが、人類が世に生類し生死に向き合うのを覚えたとき、生理的性器を隠すものに及んだのではないかと想像される。性器を守護するのは子孫すなわち血族の持続であり、それは神の宇宙につながる鎖された血族の地での安泰で、ついには敬虔な神と以心伝心を祀る儀式の装身具であったと思われる。地は地理的風土となって拡散し、ついには照葉樹林帯の呪具となって時空とともに変化する。安田シヌグの男神の姿やヤブニッケイやハマヒサカキを腰・襟に差すのは身を纏う名残ではないだろうか。

火は燃料や灯火の文明発達の烽火であるが、一方生き物は火を恐れ忌むもので、相反するような薪・柴木の貴重な存在が神の依り代となり厄除けとなるに違いない。シバキおよびその関連の方言名は里山の樹木を代表するクスノキ科のタブノキ、ヤブニッケイ、シバニッケイ、シロダモ、イヌガシなど、またブナ科のカシ類やシイ類、イスノキやヤブツバキなど柴木に使われた木の総称であろう。ススキはシバ（琉球国由来記）といい²⁰、ススキは島創りのもとになる草本であり、燃料の他、屋根の茅、壁・垣、畑地の敷き草、緑肥など人の生活の身近な材料で、琉球諸島のいたる所において、神事の拝みや祓いの普遍的な呪具である。シバの語は文明の発達—持続—展開の重要な有用植物としての代名詞のように考えられる。

人類はその始原から、頭でものを考え知恵を生み出す元であることを認知し、生命の誕生と育成で血族の存続を願

っていたと思われる。故に、地に生ずる植物をもって頭に冠を飾って全霊を集中し、全身を飾り整えて天・神と話をするのである。時空を経て、装身具と神に思いを伝える人の心の象徴を示すカーブイに表現するようになる。シヌグの呪具はカーブイ（鳥、天、神）、杖（再生、祓い）、枝（神の依り代、祓い）が一体である。

ある地域の神事や呪具の植物は、あるものを契機に独自の信仰を生み出す素地があり、伝播して普遍的価値を生み出す場合がある。焼畑農業は世界、とくに東南アジア、中国各地、東アジアに共通する歴史遺産で、焼畑農業およびその民俗信仰はどのように伝播したのか、小野が「・・・この奄美の冬折目、沖縄本島北部の芋折目は九州本土の霜月祭りと連鎖していて、この冬祭りも芋の焼畑も九州山地文化の南下と理解できようと思う。山芋、里芋の焼畑が九州山地から南島へ伝えられたというにはなお疑問があることは事実である」²²と説くように、その文化は広い視野で考究しなければならない課題である。照葉樹林帯における焼畑農業文化について、作物種の伝来、栽培方法、暮らし方や民俗信仰など、九州からの南進というだけでなく、北進を含め西方南方にも思いを致すことが大事であると思われる。

モクタチバナは水信仰か

2015年のシルガミでは、大川（フブガー）の掃除は正午過ぎに着いた時にはすでに男性区長が女性事務員と供え物と線香を捧げ御願は済んでいて、堰も取り外されていて水を流しながら藻も洗い流す作業が始まっていた。総勢男女20人ほどで仲田²³の調査時とほぼ同様の作業が行われた。カーサライ（池の掃除）は男数名が池の中に入り、石垣に生えるガジュマル、ハマイヌビワ、ヤマグワなどの稚樹や、オニヤブソテツ、リュウキュウイノモトソウ、モエジマシダなどを取り除き、石垣に付着している藻を水圧の強いジェットで丁寧に剥ぎ落した。大川の周辺は、男女が一緒になって背後の御嶽林の林縁に生える雑草木を刈り大きな枯木を伐採して除去した（図1）。

午後1時過ぎに9本の杭を縛っているカズラが解かれた。カズラはタイワングズ（図4、マメ科、*Pueraria*

Montana(Lour.) Merr.)、杭に使われているのはモクタチバナ(ヤブコウジ科、*Ardisia sieboldii* Miq.)で、カズラはまだ丈夫そうであったが杭は古いものが2~3本腐れて中途から欠けているものもあった。杭は9本の中伐ってきた新しいもの3本を換え、新しいカズラで再度縛り直した。午後2時40分頃捕まえていたウナギを池に放ち、堰を止めて再び新しい湧水を溜めていった(図5)。その後再度区長と事務員が来て線香を捧げ御願して行事を終了した。モクタチバナとタイワンクズは伝統として変わらずに使われているという。午後4時10分頃区長がお宮に拝礼に行ったが、トントトンの行事は行われず、シルガミには仲田²⁾が実見した祝女や神人たちの神々しい姿は見られなかった。



図4 タイワンクズ(うるま市楚南)
(2013年9月16日)



写真5 新調したモクタチバナの9本の束
(2015年9月5日)

シルガミの様子は、島袋源七『山原の土俗』(1929年)仲里松吉『具志堅誌』(1978年)などの戦後から最近の記載・報告を通して今日の状況を振りかえると、祭祀植物は同種でも行事の内容は目まぐるしく変化していき次第に簡素化されていくようである²⁾。

フブガー(大川、大井)は、池の傍に建てられた石板の記述によると、古来具志堅部落の生活および農業用水として村人の暮らしを守り、また産水、若水、シディ水、湯灌として用いられ信仰の対象となり聖水とされてきた。昭和30年頃まではその下流域は、広大な美田(ハーソー、具志堅田、兼久田など)をなしていた。水はシントゥムイの裾野に広がるドリーネ地帯や森林が涵養した地下水が、流域の古期石灰岩の空洞や割目に浸透して、フブガーで湧出するものと推察されている。平成15~21年田園空間整備事業により現況の石積みに改修された。

部落の発生と定着を促し、村人の生命の誕生と生活を守護し、祖霊を崇め、永遠の蘇生と発展を願う水源地として、フブガーは村の根幹にかかわるものとして井泉御願(ハーウガミ)の最も大切な地所になったものと考えられる。その御願の真意が、今日なお村人総出の念入りのカーサライ行事を保持している所以なのだろう。

杭の縛束用のタイワンクズは、周りに生えるノアサガオやカラスキバサンキライ、オオイタビ、トウツルモドキ、ヘクソカズラなどより太くて縛り易く丈夫で長持ちする事に因るだろう。日本のクズは山に自生する代表的なツル植物で、丈夫で弾力があり、細く長いので縄の代わりによく使われ、繊維、また根から良質の粉(でん粉)が採れ、薬用としても知られている³³⁾。具志堅の方言名はヤマカランダ(山蔓の意)またムクジという。タイワンクズは沖縄では根から粉を採っていたとは聞かないが、方言でムは芋の芋、クジは葛あるいは粉の意に似て、また国頭村比地のカーブイを巻く蔓に使われるものの¹⁶⁾、根の利用やシニーグとの関係は不明である。

モクタチバナの杭は元口径が約3~8cmのものを長さ約3~4mに切り揃え、オオジマ(大島、部落発祥の地)、ミージマ(新島)、サガヤ(佐賀屋)の3部落が9本の杭を3年回りで1年に3本ずつ換えていく。今回はミージマの当番である。杭を立てる謂れは、湧水があまりにも多く勢

いがあるので、最初はシンメナービ（芋炊き、行事など大勢の炊き物用に使う、鉄製またはアルミニウム製の大鍋）を返してそれが動かないように木を立てて抑えていたが、いつの頃からか大きな平石でこれを抑え、その上にモクタチバナの杭を組んだという。湧き口の平石の存在は村人たちの間で長く疑問視されていたが、ある年に土を掘って確認したようである。湧き口の立てた杭の周囲は内径約3m円形で、約1m大の11個の石を敷きまわしている。

杭9本の数の意味は不明であるが、沖縄の祭事などの習慣には線香その他について奇数を基本にするので、3本の3部落、また湧き口の平石を抑えるにはその9本が適宜であったこともあろう。

モクタチバナの方言名は、一般的に生木を焼いた灰は藍染めの添加用に重宝するのでアクチ・アクチャーなどと称する^{12,21,23)}。モクタチバナは海岸から低地の石灰岩地帯に多く産し、果実は球形、径8~10mmで11月から翌年の3月にかけて生子^{12,15)}、房状に赤から暗紫色に熟する(図6)。西表島ではお盆にムリムヌといって野生の実を供える習慣があり、果実の食べられるキダキ(リュウキュウコクタン)、フグ(イタジイ)、マツマヤ(コバンモチ)、カチナズ(ナシカズラ)、トゥカチキ(シャリンバイ)、アブチャンキ(モクタチバナ)などを仏壇に飾る、山の神はそれを山の印としてよろこぶという³⁰⁾。宮古島市多良間島でもモクタチバナをウギスッギーと称してお盆のとき仏壇に実を供え、狩俣部落の虫掃除の神行事ではモクタチバナの葉に細切りの豚の三枚肉をのせて供える³⁵⁾。



図6 モクタチバナの果実(本部町具志堅)
(2015年11月27日)

モクタチバナは具志堅区ではタニナイ・タニナイギという。タニは鞆丸、ナイは果実のことで、実の着け方や形・色に由来するものであろうが、シルガミの男ユバイ・男神を象徴しているようにもみえて深長である。部族を支える湧きの水が永遠のものであるように、平石がその量をよく制御するように9本の杭を立て、モクタチバナに神への祈願を託しているのだろうか。

シニグ行事は、本来、水源であり神の坐すウグワン山、グシクムイ、クランモー、ハサーギ、そして湧水の大川、全ての禍福を受容する海、神に捧げるシニグ舞いは一連もので、グシクムイ(城山)とウグワンムイ(山)で伐る²⁾祭祀植物のヤブニッケイとモクタチバナはこれらの行事の祈りの深遠な意義がこめられているに違いない。

具志堅区の部族の歴史は伊是名村の尚氏に関係する時代があるので³⁶⁾、シヌグを通して伊是名村に結びつかないか、さらに各地のシヌグの起源や祭祀植物は部族間のつながりの歴史の流れに関係しないか、更なる研究が求められるであろう。

具志堅区在住の大村光洋氏(昭和11年生)は瀬底、石嘉波、崎本部、謝花、具志堅、備瀬のシヌグをVTRに収めるなど³⁷⁾、シニグに熱い思いを寄せられ、本調査に多大なるご協力をいただいた。仲宗根義雄氏(昭和6年生)にはカーサライ行事の際にその内容や植物の方言名・意味などをご教示いただいた。また具志堅区民には、忙しい行事中に足手まといの調査を許された。ご指導と温かいご配慮に合わせて深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 金城龍生: 編集「シニグ練習教本 シニグへの誘い(本部町具志堅)」2010年、本部町具志堅シニグ保存会
- 2) 仲田善明「本部のシヌグ」2003年、沖縄学研究所、p227-255、東京
- 3) 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑・木本編II」1980年、保育社、p199-204
- 4) 初島住彦「琉球植物誌(追加・訂正版)」1975年、沖縄生物教育出版会、p287-288

- 5) 初島住彦・天野鉄夫「(増補・訂正) 琉球植物目録」1994年、沖縄生物学会、p61-62、沖縄
- 6) 中国科学院植物研究所「中国高等植物図鑑、補編第一冊」2001年、科学出版社 p590、中国
- 7) 沖縄県教育庁文化財課史料編集班「沖縄県史 各論編 第1巻自然環境」2015年、p456-481、沖縄県教育委員会
- 8) 諸兄里秀幸・新里孝和・他「沖縄県の社寺林報告」(緑地研究会：社寺林の研究・6)、森林・第6号、1977年、p183-235、(財団法人)土井林学振興会、東京
- 9) 澤岨安喜「森林生態に関する研究 沖縄島南部のヤブニッケイ林の林分構造」1978年、沖縄県林業試験場研究報告、No.20、p20-35、沖縄
- 10) 外間現誠・末吉幸満・仲原秀明「本部半島の森林植生」1973年、沖縄県林業試験場、研究報告 No.16、p72-180、沖縄
- 11) 沖縄県本部町企画財政課「本部町山里円錐カルスト自然公園化検討調査報告書」2002年、p5-16、本部町、沖縄
- 12) 天野鉄夫「琉球列島有用樹木誌」1982年、琉球列島有用樹木誌刊行会、沖縄
- 13) 長沢 武「野外植物民俗事苑」2012年、ほおずき書籍、長野県
- 14) 上原敬二「樹木大図説」1981年(第9刷)、有明書房、東京
- 15) 澤岨安喜「沖縄の自然 27 木の実・木のたね」1983年、(有)新星図書出版、沖縄
- 16) 新里孝和「沖縄シヌグ神祭の植物観」2013年、名護博物館紀要「あじまあ」17、p41-64、沖縄
- 17) 深津 正「植物和名語源新考」1979年、八坂書房、p19-22、東京
- 18) 前川文夫「植物の名前の話」1998年、p39-46、p110、八坂書房、東京
- 19) 服部 保・浅見佳世「照葉樹林の自然保護」(沼田真：編「自然保護ハンドブック」) 1998年、p371-382、朝倉書店、東京
- 20) 牧野富太郎「牧野新日本植物図鑑」1968年(17版)、p193-195、北隆館、東京
- 21) 天野鉄夫「琉球列島植物方言集」1979年、新星図書出版、沖縄
- 22) 新里孝和・木下義宣「国頭村奥の植物方言」2012年、名護博物館紀要「あじまあ」16、p37-63、沖縄
- 23) 大野隼夫「奄美群島植物方言集」1995年、財団法人奄美文化財団、p20、鹿児島
- 24) 尚学図書編集「国語大辞典 言泉」1986年、小学館、東京
- 25) 飯島義晴「柴」(堀田満：編集代表) 1991年(第2刷)、p1434、平凡社、東京
- 26) 佐野賢治「薪」(堀田満：編集代表) 1991年(第2刷)、p1434、平凡社、東京
- 27) 狩野敏次「昔話にみる山の霊力」2007年、(株)雄山閣、東京
- 28) 新里孝和・芝 正巳「沖縄・国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ(Ⅱ)」2014年、琉球大学農学部学術報告 第61号、p67-78、沖縄
- 29) 足田輝一「樹の文化誌」1985年、p413-423、朝日新聞社、東京
- 30) 島袋正敏「生きもの」(名護市史・本編9、民俗Ⅱ自然の文化誌) 2001年、p214、名護市史編さん委員会、名護市役所、沖縄
- 31) 新里孝和・芝 正巳「沖縄・国頭村奥シヌグの祭祀植物イヌガシ」2014年、琉球大学農学部学術報告 第61号、p79-86、沖縄
- 32) 小野重朗「南日本の民俗文化Ⅵ 南島の祭り」(生態史としての南島文化、三 生態史的展開) 1994年、p199-205、(株)第一書房、東京
- 33) 長澤 武「ものと人間の文化史 101・植物民俗」2001年、p312、法政大学出版会、東京
- 34) 松山利夫・山本紀夫：編「木の実の文化誌」1992年、朝日新聞社、p42、東京
- 35) 仲間勇榮「島社会の森林と文化」2012年、p258,370、琉球書房((株)メディア・エクスプレス)、沖縄
- 36) 具志堅の歴史編集会(代表 仲里長和)「具志堅Ⅰ 具志堅の歴史」2012年、沖縄
- 37) 本部町文化財保存調査委員会編集「本部町の文化財第九集」2000年、p186、本部町教育委員会、沖縄